

テーマ：

聖書について

私たちの教会において最も聖なる場所である至聖所の宝座の上には、常に福音経が置かれています。このことは、福音経がいかに大切なものであるかを物語っています。私たちは新約聖書の正教会訳（亜使徒日本の大主教聖ニコライ・中井訳）を持っています。福音経は、小祈祷書と共に少しずつでも良いですから、毎日読むべき霊の糧です。

（※洗礼のときに、胸掛け十字架やイコンと共に正教会訳の新約聖書を揃えるのはこのためです。新約聖書と小祈祷書は、一家庭に一冊ではなく、一人に一冊です）。

福音経に限らず聖書を読むときに留意すべきことは、これは小説でもなければ、教科書でもなく、霊を救うための神のことばであるという点です。

十九世紀の優れた神学者であるモスクワの府主教聖フィラレトは、創世記の記述が当時の天文学の解明した事実と合わないという批判に対して、「聖書は天文学や生物学の教科書ではない。聖書は霊を救うための本である」と答えています。

人は普通の本を読むとき、わからないことばは辞書をひけば、大抵理解できます。しかし神のことばはそのようなことばではありません。

例えば、天地創造の七日間ですが、この「一日」の意味は今日の二十四時間ではなく、一定のときの流れを表す単位であり、聖師父の教えに拠れば、現在はまだその七日目が続いています。

神さまが私たちに明かされないことは、私たち人間の知恵ではわかりません。そのようなとき、わからないものは、素直にわからないとして、先を読みます。**わからないこと、知れないことを素直に受け入れる従順・謙遜な心が大切です。**

福音経を毎日読んでいると、突然あるとき、それまで何年も何十年もわからなかったことが、目からうろこがおちるように腑に落ちるときがあります。それは、神さまが自分にそのことばの本当の意味を明かしてくれる時が来たからです。神さまのことばは、それを読む人の精神性や信仰経験によって、理解度が異なります。

普通の本であれば、わからないときには「勉強」しなければならないといって勉強会に通います。しかし聖書のことばは必ずしもそうではないのです。正教会においては、聖書の解釈は聖師父の注釈に基づいて行われ、非常に深い理解をもたらしてくれますが、その話を聞いても自分の精神性の背丈がそこまでいっていなければ、やはりわからないのです。

聖書は、祈りとともに読んでいくうちに、腑に落ちる部分が次第に多く、そして深くなっていきます。

家庭で聖書を読むときは、イコンの前で起立し（できれば）、十字を描いて心の中が静まるのを待ち、その後読み始めます。その日の分を読み終えたら、また十字を描いて聖書をもとの場所に置きましょう。

ロシアでは、イコンやランパーダを置いて祈祷する場所を部屋の東の角（または南東や北東の角）に設け、「美しい角（クラスヌィ・ウーゴル）」と呼びますが、日本では、必ずしも部屋の角にする必要はありません。